埼玉支部報　第２号

目　次

埼玉支部長年頭のご挨拶(石橋正美)　1

活動報告　2

第１回安全登山講演会報告(安全登山委員会)　2

忘年山行報告(山下順子)　4

５０山ラリーについて(集会・山行委員会)　4

県内の山の話題　5

雲取山荘のできるまで(新井信太郎)　5

登山用品店紹介「山遊人」(小川元章)　7

会務報告など　7

埼玉支部委員会・同好会の状況、本部の状況　7

会員異動状況　8

雲取山荘の日の出（提供；新井会員）

年頭のご挨拶

支部長　石橋正美

埼玉支部が発足して早や 10 カ月になろうとしておりますが、その間会員の皆様のご理解と役員の方々のご努力で、ようやく支部としての体裁も整って参りました。支部報・HP等の広報活動や山行・講演会等の実践活動も軌道に乗り始め、各専門委員会も多くの行事を実行に移しています。行き届かない点もあるかと思いますが、時に試行錯誤を繰り返しながら本年は更に支部活動の充実に努力して参りたいと存じます。

今、日本山岳会では、会員の減少と高齢化が大きな問題となっております。平成14年末の6,016名をピークに本年は 5,184 名と 8 年間で 830 名も減少しております。会員の減少は会の財政を圧迫し、会の活動が十分に出来なくなることを意味します。また、会員の平均年齢は約 66 歳で年々一年近く高くなっています。当然、会の活動に若さと元気が薄れていくことを意味します。この二つが遠くない将来、会に致命的な影響をもたらすことを憂い、尾上会長がその解決のため本腰を入れて立ち上げた一つが支部活性化プロジェクトであります。活性化実現に向けての柱の一つは会員の獲得それも若い会員の獲得運動です。具体的には、毎年各支部で一割ずつ会員を増やそうという目標が掲げられました。この目標実現のため他支部に負けないよう埼玉支部も会員獲得に努めたいと思います。皆さんの友人知人に日本山岳会に関心を持たれる方がおられたら是非声をかけていただきたい、必要なら紹介者の一人になることに躊躇はいたしません。柱の二つ目は新しい支部の設立です。本部から遠い地域に住んでいる会員のための活動拠点です。昨年出来た東京多摩支部や埼玉支部の設立はこの流れの中にあります。支部を拠点に活発な活動を展開することがまさにそのまま山岳会の活性化につながり、会員の獲得を容易にする道であると思います。

年が改まり、助走の時を経ていよいよ埼玉支部が活発に動き出す時がやってきたという思いがいたします。事業を企画し主導するのは役員であるにしろ、一人ひとりの会員が参加意識を強く持つことが何よりも大事なことです。是非とも本年は支部のあらゆる事業、行事に積極的に参加され、あわせて会員同士の交流を十分楽しまれることを期待いたしまして、ご挨拶といたします。

第一回安全登山講演会
「増加傾向の山岳遭難」に対する対策設定へのヒント・概要　安全登山委員会主催

本年4月４日の日本山岳会埼玉支部設立後、最初の記念すべき講演が9月15日(水)、JACK大宮5階研修室で開催された。講師は、同会埼玉支部副支部長であり、登山経験豊かな医師でもある野村孝義先生。石橋正美支部長の開催の挨拶に続き、安全登山委員会の松本敏夫委員長の司会により進められた。

主たるテーマは、増加傾向にある中・高齢者の山岳遭難に対する安全対策、健康管理上の問題。 2009年7月に発生した大雪山系トムラウシ山遭難事故の医学的側面や登山者の立場からの原因の推察。野村先生の出身校である慈恵医科大槍ヶ岳診療所での診療活動の経験談や、開設当時から現代に至る診療所や周囲を取り巻く環境の変遷など往時のスライドを交え、短い時間のなかにも非常に内容の濃い講演となった。

講師の野村副支部長

講演概要
中・高齢者の安全対策と健康管理上の要点

中高年登山者のメディカルチェックは欠かせないが、リスクの無い登山はありえない。特に突然死の予見は今のところ、不可能。日常生活の中で自分の体調の変化に気を配る。例えば、脈拍数やリズムの乱れなどのチェックを取り入れる。朝、起きがけに起立して目を閉じた時にからだのふらつき、バランスの変化がないか気をつけてみる、など。特に普段、自覚症状がなく、健康状態が安定しているといった思い込みをもつ慢性疾患患者の登山は、危ない。登山中の負荷によって致命的な病態（病気の容態、病状）に移行してしまう「急変の芽」の存在に気がつかないことがある。「クスリさえ飲んでいればよい」と思わないで、山行前に医師の診察を受けること。大切なことは「病気の有無」ではなく「病態の変化」にある。また、山行中は「水分」「エネルギー補給」に十分注意し、疲労の原因となる「酸化ストレス」対策（注1．）を忘れない。糖尿病（投薬）患者の登山は、登山活動によるエネルギー消費の増加のため、低血糖を起こし、事故の原因になる可能性がある。「自己血糖測定器」を利用し、いつも自分の血糖値を確認しておくことが事故防止につながる。最近の「インクレチン関連薬」は血糖上昇時にのみ作用する優れもので、膵臓（すいぞう）の働きをよくする。今後に期待が集まる薬といえる。

トムラウシ山遭難事故の教訓から学んだこと

偶発性低体温症は、身体の中心部温度(直腸温)が35℃以下で起こる病態。夏山でも起き、初期は単純疲労と似た症状。雨天に気温10℃、風速10M 以上の環境下で低体温症発現の条件が揃い、普段、あり得ない異常な言動が現れれば、それと判断はつく。生命を司る中枢脳細胞は低温、低酸素にとても敏感。これまであまり強調されていなかった脳の機能障害と身体症状との同時出現が今度の遭難で実証された。低体温症で重要なポイントは34℃までがセフティライン。それまでに適切な対応が出来ないと回復が困難になる。今回は、入山前の参加者の健康状態は不明だが、通常の発症経過時間に比べ、発症から2～4時間以内という短い時間で多数の死亡者を見た事例となっている。発症には濡れ、寒さなど複数の要因が関係するが、なかでもエネルギー不足が大きく関わる。脳細胞、筋肉のエネルギー源には、重要な炭水化物を中心に短時間毎のこまめな補給が必要不可欠。エネルギー補給が、十分な状態になれば、判断能力も回復し、体熱の消失に有効な防寒、防風対策などの必要な対処へとつながる。今回もこれほど多くの犠牲者を出さずに済んだと思われる。
特に中高年登山者は緊急事態に備え、携行食は欠かさないこと。また、昨今、ダイエットが流行しているとはいえ、「山で痩せて帰る」ことを目標にするのは危険。特に人工甘味料ではエネルギーにはならない。携行食の組成内容を吟味して準備すること、歩行中でも食べやすいこと、などが必要条件となる。

槍ヶ岳診療所の経験から

槍ヶ岳診療所と当時の野村副支部長

慈恵医科大学槍ヶ岳診療所の変遷
慈恵医科大槍ヶ岳診療所の開設は昭和25年。登山者の少ないのんびりした時代であったが、翌年には限られた設備や

医療機器のなかで盲腸炎の手術が行われた。昭和29年に槍ヶ岳山荘と改名、冬季小屋兼診療所が完成。昭和30年代には発電機が稼動し、診療所に電灯がともる。また、別棟に冬季小屋兼診療所が出来、ポンプによる水揚げ、ヘリポートを急造し、荷揚げが行われるようになった。昭和40年代から平成元年にかけては、山荘にハンディーキが設置され、長野県警にヘリコプター常駐体制が整備された。その後、長野県山岳救助隊が常駐するようになった。昭和54年8月、山頂で発生した落雷による2名の死亡事故を契機に、翌年には雷探知機が設置された。平成2年11月には診療所開設40周年の祝賀会が開かれ、大森薫雄先生の著作「雲の上の診療所」が出版された。
平成13年にはテレビ会議システムであるギガビットネットワーク（注2．）による山岳緊急医療システムが開設され、平成19年10月には槍ヶ岳山岳診療所が新築された。

慈恵医科大学槍ヶ岳診療所受診者の年齢、疾病など
平成13年から平成19年までの受診者年齢別割合は40歳～69歳までの中・高齢者が56％で半数を超える。病因別には高山病が35％、次いで疲労・脱水症・筋肉痛が18％、消化器疾患5％、外傷、感冒その他で高山病の割合が高い。槍ヶ岳山荘で「高山病の発症原因を探る調査」を2006年7月16日～9月27日まで実施。レイクルイーズ急性高山病評価システム（注3．）を用いたアンケート調査と臨床的解析によると調査票1544名のうち一般登山者の17％(270名)が陽性で急性高山病、74％が陰性（9％が未記入）であった。レイクルイーズ評価システムと酸素飽和度80％未満の割合では陽性の割合が高く、低所高山病での自己評価システムとして有効。急性高山病の一要因として睡眠不足が挙げられる。低所高山病の予防には、前日の宿泊先―車中泊、自宅、小屋泊―などの影響を考慮し、十分な睡眠をとる。また、最近、疲労回復の主役は、適度の睡眠（7時間）というのが定説となっている。登山中の睡眠の質に係わる問題だが、これまでの睡眠薬絶対禁忌から、無呼吸症候群などを除いて、各個人に安全な睡眠導入薬（注4．メラトニンなど）使用の可否について、検討が必要な時期が来たと思われる。また、他の予防として一気に高度をあげないことなどが示唆されている。
（記録　恵　秀彦）

注1．　活性酸素など酸化反応により引き起こされる生体にとって有害な作用のこと
注2．　ギガビット/秒の高速伝送を可能にする高速通信網。
注3．　カナダのレイクルイーズで開催された第7回国際低酸素会議で作成された急性高山病を判定するシステム。急性高山病の定義は、「高所に達してあまり時間が経ってない状況で、頭痛があり且つ、消化器不良、疲労、めまい、睡眠障害のうち少なくとも1つの症状があるもの」とされている。
注4．　メラトニンは松果体から分泌されるホルモンで、神経内分泌系の調節を担っている。その役割は睡眠周期の調節。その他、代謝、性行動、食欲等多くの機構に関与しており、特に免疫賦活作用や抗酸化作用により“抗加齢サプリメント”として有名。

参加者からは有意義なご意見を多数頂き、今後の安全登山委員会で主催する講演会の参考としたい。なお、1 月 29 日に第 2 回講演会が開催される。お知り合いの方をお誘いの上、是非ご参加ください。

５０山ラリーについて　　集会・山行委員会

支部会員各自が積極的に個人山行を実施して頂く為に、50山を選定しました。50山の詳細は「支部報第1号」付録または埼玉支部ホームページに掲載しています。2010 年 4 月以降に50山に登った場合、登山報告を出して頂き、登った山の数に基づいてランキングし、ホームページや支部報で状況を掲載、上位の方には記念品進呈の予定なので支部会員各位の参加をお願いします。気軽に50山に登って頂ける山行を毎月開催しています。
具体的な参加の手順は次のとおりです。

① 50山のどれかを登山

② 登山報告書を作成
・実施年月日
・参加者名／会員番号
・山名と50山 No
・コース概要とタイム
・写真（山・コースの状況が分かる写真があれば）
・その他（他の人に役立つコメントがあれば）
(*)報告書の推奨様式と記載例はホームページに載せる予定です。

③ 事務局（山行委員会南波会員宛て）に送付
(*)電子メールまたは郵便で事務局に報告する。

④ ホームページに登山コース、写真、コメントなどを掲示

⑤ 支部報で個人ランキングや人気の山ランキングなどを発表、個人上位者には記念品進呈

小川元気プラザからの堂平山（左）と笠山（右）

忘年山行　山下順子

12月とは思えない暖かく晴れた日の午後から日本山岳会埼玉支部の忘年山行が始まった。東上線東武竹沢駅に集まった18人の会員が、金勝山東登山口へ向かう。舗装道路を少し進むと、左へ折れて小広い山道となる。辺りは、葉の落ちた木々が多い初冬の風景だが、気持ちの良い明るい印象である。「メールで調べたら、山梨にも金勝山があるんですよね。読んでいるうちに、登り口の駅名が違うので変だと思いましたよ」と、傍の方との会話も楽しい。枯れ葉散る登り道に汗をかき始めたと思う間もなく、金勝山（260m）の頂上に出た。低山ながら適度な登り道のある眺望の良い山である。眼下の小川町を見下ろして時間合わせの休憩をとり急坂を下ると、すぐに今夜の宿小川げんきプラザに到着した。

女性会員6人一緒の洋室にそれぞれのベットを確保して落ち着いた後、大山光一さんと田尻一實さんの講演が始まった。美しいスライドを写しながら、お2人は、豊かな山の経験をそれぞれの語り口でお話して下さる。憧れの山や未知の地域の情報と共に夢に懸けた情熱がひしひしと伝わり、聴く人の心を熱くさせてくれた。

金勝山から小川元気プラザ

ヘルシーで味の良い夕食後、入浴を済ませて懇談会となる。石橋支部長のご挨拶の後、ビール、日本酒などもふるまわれて、初対面の方々との話がはずむ中で自己紹介が行われた。皆さん、好きでたまらない山歩きのことなので、する方もされる方も興味はつきない。その後2次会も行われ忘年の夜が過ぎていった。

元気プラザから官ノ倉山・堂平山・笠山

翌朝風は強かったが、昨日に続く冬晴れに秩父の山はもとより日光、谷川、榛名、草津の連山がはっきりと見渡せる。

これから登る官の倉山の名は、神の蔵から転じたものと言われ、隣の石尊山と共に信仰の山である。途中、この地域最古の吉田家を見学してから三光神社で今日参加する方々と合流し、総勢29人となる。そこで平川さんからストックワークとストレッチの指導を受ける。簡潔で分かり安く、若い方の行動は機敏で気持ち良い。この会のお世話をして下さっている係の方々にも共通する思いである。

スギ林の中の登りになると、今まで何度も登ったこの山に今年も来られたとの感慨がふと過る。頂上直下の岩場も程よいペースで登り、344mの官の倉山に登頂した。次々と回ってくるおやつを頂きながらなごやかな記念写真撮影の後、石の祠のある石尊山に進み、昼食となる。「いつもは、お握りは1つなのに、今日は、おいしくて2つ食べるわ」などと言い合い、雲1つ見えぬ青空の下、はるかかなたに東京スカイツリーも見える景色を喜び、同好の士と共に来られた山行に感謝する。これは、又1つ年を重ねなければならない日を目前に、最近の体力の衰えを悔やむわが身にとっては、切実の思いなのである。

石尊山で

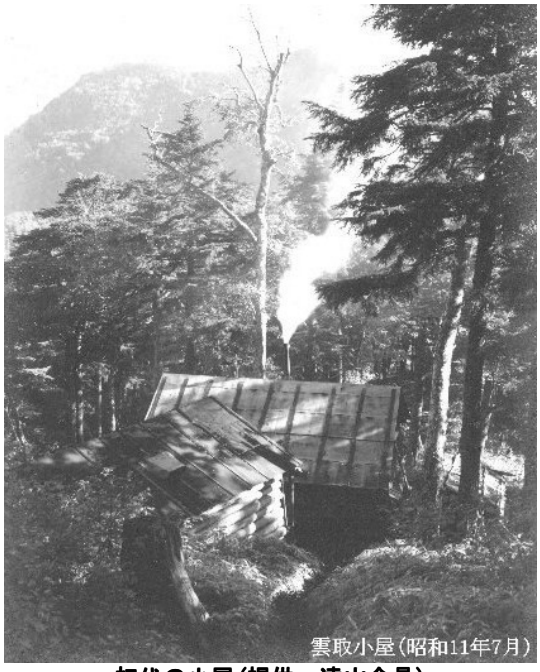
下りの鎖場は声を掛け合って慎重に降り、小川の古い街並みを抜けて老舗酒屋の柔らかい仕込み水で喉を潤し、埼玉支部の２日間の忘年行事をつつがなく終えることができた。

造り酒屋で

雲取山荘のできるまで　　新井信太郎

雲取山荘は昭和 3 年の春、雪の消えかかった 5 月、秩父営林署の職員と大血川の人たちと数名で、山小屋を作るために雲取山に登ったそうです。材料は営林署から払い下げてもらい工事費は秩父鉄道が出したのだと聞きました。7 月には出来上がったのだろう。8 月には 70 人もの宿泊者があったと聞いています。この当時の山小屋は布団や毛布などはなかったようで、夜は山小屋の土間でたき火をして雨露をしのんでいたようです。

その後、昭和5年に先代の富田治三郎氏が夏山の小屋番として山小屋に入ったのだそうです。このころの雲取山周辺では東京都（注；当時は東京府）が山梨県側の山に植林していたのです。植林をしていた人たちの泊まる山小屋が至るところにあったそうです。七つ石山には七つ石小屋。五十人平には（現在の雲取奥多摩小屋の下に）甚助小屋。三条タルミには甲州雲取小屋があったので新しく作った小屋を武州雲取小屋としたらしいです。私が持っている写真で見るとこのころも、若い女性もかなり登っていたようで女性はブルマに黒のストッキング足袋の下にわらじをはいていたようでした。



初代の小屋（提供；遠山会員）

それではいつ誰が、最初に雲取山に登ったのだろうか・・？　私は今から 20 年ぐらい前、雲取小屋上の登山道で石斧を数個拾いました。本物か偽物なのか分からなかったので、石斧の権威者である明治大学の教授の家に持って行って調べてもらいました。先生はいろんな本を見せてくれました。その中に一行だけ小さな字で、雲取小屋の小屋番が石斧を拾ったその石斧は行方不明になっていると書いてありました。先生は私が持って行った石斧を見て 5 千年前の縄文人のものだと言ってくれました。石斧の見つかった場所は、現在も山小屋で使っている水口のある付近で夏の間狩りをしていたようでした。石斧はバチ形、ブンドン形とそれに小さな破片で肉を切ったり脂をはぎとったものだと聞きました。その頃は山ならいくらでも動物がいて何時でも捕れたと思うだろうが、1 頭のシカを捕るのも大変だったようでした。

その後、いつの頃からか分かりませんが、木地師が雲取山にも来るようになったようでした。木地師は雲取にあるトウヒという木がたくさんあったので、この木を切り倒して板目にはがして、秋まで乾燥させて軽くしてから下の家に持ちおろしたようでした。持ちおろした板はフルイのたがにして使ったり売り歩いていたそうです。板目にはがすのは木の目が通っていなければ板目にはがせないので、大木の根元に斧で彫り込みを入れては良い板目の木だけを切っていたようです。斧で切りこんでも目の良くない木は、立ち枯れているのが数本見つかりました。

私の子供の頃までは秩父の家でも 40 から 50 歳ぐらいの男性が、春先にミノを 2 枚ぐらい肩にかけて売って歩いていました。父親に聞くとあの人はサンカ（山の中や川の中、人目に触れないところに住んでいた人のこと）の人で、町の人には分からない所に住んでいる人だと話してくれました。その後、数年もたたないうちにその人は来なくなりましたが昔は色々な人がいたのだと思いました。

山小屋が作られてからは木地師を見ていないと富田さんは言っていました。この木地師より後か前かは分かりませんが私が小屋番になってからも、一之瀬、丹波、小菅、鴨沢、峰の集落の人たちが 6 月になると 3 人 4 人とまとまって雲取小屋にやって来ました。皆さんは 1 メートルもの長いヤマウドを数本ずつかついで山小屋のお土産に持ってきてくれました。飲みながら登ってきた酒をまた小屋でも飲んで、皆さん上機嫌でした。皆さん背広にネクタイ、短靴という町を歩く格好でしたが、お昼を食べて三峰神社に向かって千鳥足で下りて行きました。あんなに酔って三峰神社まで着けるのか心配でしたが、皆さん無事に着いたようでした。初めの頃は帰りも雲取山を越えて帰って行ったようでした。昭和 24 年ごろには登りは雲取越えで、帰りは電車で帰って行ったそうです。

雲取山の山頂にある一等三角点は、埼玉県と東京都の県境より約 50 センチ東京都側に入った所に三角点の石があるのです。山梨県は山頂から約 30 メートル南に向かって現在の避難小屋の辺りの尾根上に東京都、埼玉県、山梨県境があるのです。雲取山全体に言えば雲取山は一都二県の上にある山なのです。雲取山の一等三角点には東京都だけの住所、東京都西多摩郡奥多摩町日原何番地と地番までがあるのです。埼玉県も山梨県も三角点には住所がないのです。

雲取山荘は埼玉県と東京都の県境の上の道を距離にして約700メートル降りた尾根上に建っているのです。昔も今も山小屋の場所はあまり変わっていませんが 30 メートル下がった所に、山小屋は建っているのです。表は南側で東京都西多摩郡奥多摩町日原、裏は西側で埼玉県秩父市大滝なのです。

初代の雲取小屋は昭和 3 年の建設でした。全部で 3 棟あったそうです。2 代目は昭和 19 年から 20 年にかけての建設で 150 人収容の立派な二階建ての山小屋になりました。その後、登山者の増加で23年には客室を増築し300人収容の山小屋になりました。この年、雲取ヒュッテもできて、雲取山は最高の登山者で賑わいました。建設から 50 年がたち山小屋もだいぶ痛んでしまい数度直したが、直しにはかなりのお金がかかるので新しい山小屋を作ることにしました。山小屋を作るのには大変でした。埼玉県、東京都、営林署、水源林事務所、大滝村、奥多摩町など何度も行って書類を作りまし

た。

２代目の小屋

3 代目は平成 11 年 5 月から建設に取り掛かりました。重機を 7 台、大きい物は分解してヘリコプターで上げました。工事をする人たちは朝は6時頃から夕方は暗くなるまで働いておりました。そのかいあって 10 月 1 日には小屋は出来上がりました。2 日から営業を始めたのでした。

登山者の中には古い小屋もよかったという人もおりましたが、古い小屋では年々宿泊者が減っていったのと修理費が年々かかるので、思い切って立て替えることにしました。山小屋は秩父鉄道の所有でしたので、権利を買って建て替えることにしました。建て替えて営業をするまでに 3 億円以上はかかりました。お金は銀行から借り入れました。返済は大変ですが、家の財産を処分しなくてどうにか済みそうです。

トイレは小屋の前に東京都が 5 年ぐらい前に 1 億 3 千万円で作ってくれました。冬は氷点下 10 度から 15 度と下がるので、水が凍ってしまい使えなくなってしまいます。2 年後、冬でも使えるトイレがあるのが見つかったので作ることに決めました。2 千万円の補助金を環境省からもらい 4 千万円で作ることができました。トイレは 4 千万円と安かったのですが、トイレを動かす経費が月に 50 万円もかかるのです。6 か月間は氷点下なのでトイレに 300 万円もの経費がかかってしまうのです。泊まり客がいなくても電気を止めることはできないのです。水は氷点下にならないように電気で温めて循環しているのです。登山者がいなくても、電気を切ってしまえばすぐにタンクの水もパイプの中の水も凍ってしまうので、凍ってしまえばトイレは春まで使えなくなってしまいます。夏用トイレは 5 月から 10 月まで使い、冬用トイレは 11 月から 4 月までで、夏用、冬用に分けて使用しているのです。

３代目（現在）の小屋

山小屋の話はこれで終わりますが、山小屋を作るのには、いい山小屋だなあーと言われるようにするために大変なお金がかかるものです。雲取山荘はまだまだ未完成で、まだまだ計画の途中です。

これからも、機会があれば、木々の話、草花の話などを書いてみたいですね。

雲取山からの富士山

県内の登山用品店紹介「山遊人」

日本山岳会・埼玉支部の皆さんこんにちは！　登山用品店・「山遊人（さんゆうじん）」の小川元章です。埼玉支部の山行委員会・安全登山委員会の委員をさせていただいています。

「山遊人」は埼玉の奥武蔵の玄関口でもある西武池袋線飯能駅の北口ロータリー右手にあります。ロータリー右手奥を見ていただくと何やら黒い影が…？その正体は店長・小川の等身大の黒いスタンド看板とエスパーステントが店前に！すぐにおわかりいただけると思います。

「山遊人」は、山が好きな方々が「今日こんな山に行ってきたよ！」とか、「あそこの山では今、この花が見ごろだよ！」とか楽しい山の話で集まれるような登山情報の発信基地となれるような店作りをしています。

山行委員・安全登山委員と同会のメンバーとして埼玉支部の皆さんと共に山を楽しんで行けたらと思っています。また、飯能周辺の山にお越しの際はぜひ遠慮なく遊びにお立ち寄り下さい！よろしくお願い致します。

【日本山岳会・埼玉支部の方へ】
日本山岳会の会員証を提示していただき、現金でお買い上げの方には店頭価格より更に5%OFF に致します。
また通信販売も致します。1万円以上お買い上げいただければ送料サービスにさせていただきます。
【営業案内】
AM10:00～PM7:00　水曜日定休
E-mail:info@san-yu-jin.com
TEL:042(978)5515　FAX:042(978)5505
住所:〒357-0035　埼玉県飯能市柳町 23－5－103

埼玉支部の委員会状況

各委員会からの情報です。支部委員会での情報をもとに、広報委員会で編集したものです。

●総務委員会
毎月の支部委員会の開催、会員管理、会計管理、会員への連絡などをおこなっている。

●広報委員会
支部報とホームページを担当している。支部報は来年度から年３回発行を予定。単なる報告だけではなく埼玉支部ならでは記事を掲載すべく編集。ホームページは、もう少し垢ぬけたデザインを検討。コンテンツは５０山など県内の山の情報を充実させたい。山にお出かけの折りは山の情報をご提供ください。更に同好会のページも割り振って賑やかにして行く予定。

●集会・山行委員会
当初、集会委員会と山行委員会は別々だったが、現在は統合して活動している。
［開催行事］
・四季の山（夏）；南アルプス　北沢峠～早川尾根
　8/6～8/8（前夜発１泊２日）、参加者３名
・四季の山（秋）；南会津　七ヶ岳、那須三本槍岳
　10/23～10/24（1 泊２日）、参加者 12 名
・四季の山（忘年）；金勝山・官ノ倉山、「自分流登山」講演会
　12/11～12/12（1 泊２日）、参加者 33 名
　（本号の報告記事を参照してください）
・四季の山（スキー）；嬬恋村
　2/5～2/6（1 泊２日）を予定
・四季の山（冬）；奥日光　学習院光徳小屋
　2/19～2/20（1 泊２日）を予定
［５０山ラリー］（本号３頁の記事を参照してください）
［５０山山行］
５０山を気軽に登れるように企画。
・第１回　武甲山　11/13
・第２回　金勝山　12/11　(*)忘年山行の一環
・第３回　日和田山・物見山　1/8　(*)下山後に新年会
・第４回　宝登山　2/5　予定
・第５回　四阿屋山　3/5　予定
・第６回　両神山　4/9　予定
来年度も継続して実施する予定である。

●自然保護委員会
埼玉県内の山について自然保護に関連する情報を収集し委員会内で情報交換している。10/3 に自然観察を大高取山で実施し、11/23 には NPO 埼玉森林サポータークラブの飯能市東吾野現場で枝打ち作業に体験参加した。来年度は支部全体に向けた活動を予定。

●安全登山委員会

来年度は講演会に加え、講習会の実施も検討中である。今年度の状況は次のとおりである。

・第１回安全登山講演会　9/15　於：JACK 大宮
　（本号の報告記事を参照してください）
・第２回安全登山講演会　1/29　於：ときわ会館　（予定）

●社会貢献委員会

22 年度は、県内山岳組織（高校・大学山岳部）や登山用品店の調査、障害者の登山を支援するための準備を実施した。平成 23 年 4 月 17 日(日)に障害者登山を実施するので、多くの会員の参加を望みます。場所は日和田山を予定。宜しくお願いいたします。

同好会の状況

支部内に同好会を作ることができるようになりました。同好会はホームページの利用など、委員会に準じた活動をすることができます。現在、下記同好会が設立されています。支部内に同好会を持つのは埼玉支部が初めてです。

●陸地測量部

9 月に設立申請をおこない、支部委員会で了承され、10 月から活動している。現在、部員は部長(藤野会員)・副部長(遠山会員)を含めて 9 名。現在は、県内の三角点の調査、関東ふれあいの道などの地図の誤りの調査をおこなっている。調査した内容はホームページ上で提供する予定。

本部の委員会状況

本部委員会に参加されている会員の方からの情報です。今後も本部の状況をお伝えして行きたいので、本部委員会に参加されている会員の方は情報提供をよろしくお願い致します。

●総務委員会

千代田区四番町には日本山岳会の会室(ルーム)があり、そこの会議室では会を運営するために、各委員会が毎月会議を開いている。山岳会としては、雇用している事務室の事務職員以外の、会長以下全ての会員は、ボランティアで会に係わってきたという伝統がある。

総務委員会もその中の一つで、年間行事である総会や 30 支部からなる支部長会議、事務局長会議、新入会員のためのオリエンテーション、同好会同期会連絡会議、そして年次晩餐会の開催に向けて、14 人のメンバーが企画、運営を担当している。

時代の流れの中で、日本山岳会もそのあり方がいろいろ議論されているが、1905 年 10 月 14 日設立した当会の百年以上続く歴史には、小島烏水初代会長が山岳会設立主旨書で述べた、ヨーロッパアルプスにも劣らない日本の変化に富んだ山並みや自然を楽しむ精神と、趣味，嗜好を同じくする多くの仲間の賛助を望んだその姿勢が、今でも受け継がれているように思う。（宮川美知子）

●集会委員会

本部集会委員会は活動実態から言えば山行・集会委員会で、月報「山」でご覧いただいている通り、全国の会員向けに年数回の国内登山、海外登山、および講演会として土曜懇話会を開催している。また、恒例の晩餐会行事の翌日の東京近郊での記念山行（毎年 100 名ほどの参加者）のお世話を担当している。毎月第１水曜日に本部で定例会議を行っているが、全国の支部や同好会の活動とダブらないように集会委員会企画らしさを出すように工夫している。実質的に動ける委員は十数名なので年間の山行行事に何回かは参加しなければならない。今年の欧州、米国の海外登山や熊野古道奥駈け縦走、山研を利用した北アルプス集中登山などユニークな企画には遠隔地の会員参加もあり楽しんでいただいている。今後は、支部とのコラボレーションも活発にしていきたいとの方針である。（高橋努）

●資料映像委員会

資料映像委員会は、日本山岳会の収蔵する山岳関係資料、フイルムビデオ等の映像関係資料や山岳関係データの保管・管理を行っている。また、講演会、映画会、山岳関係博物館との連絡会議の開催等、文化活動の実施も手掛けるなど、幅広い活動を行っている。現在、石橋委員長を筆頭に１５名の委員と担当理事２名から構成されている。

［収蔵する山岳関係資料］

１．絵画、彫刻、はく製
　絵画は足立源一郎、茨木猪之吉画伯の作品他多数
２．地図、模型
３．石、記念品
４．写真、パネル、アルバム
５．登はん用具（ピッケル、靴、スキー、ザック）
　槇有恒、秩父宮殿下使用の品他多数
６．登山用具（テント、宿泊用具、カメラ、その他）
７．書簡、原稿
８．記録（パネル、資料、色紙）

それぞれ上記に分類し番号、バーコードや IC チップを付けてコンピュータに入力し、ロケーション管理を行っている。また、日本山岳会の保管スペースには限りがあるため、多くは専門の博物館に寄託している。大町山岳博物館、松本市山と自然博物館、秩父宮記念スポーツ博物館等にて展示してあるものもあるので、訪問の際はぜひご覧いただきたい。

［フイルムビデオ］

黎明期の貴重な映像資料を多数保管しており、毎年数回映画会を行っている。また、ガラス乾板の写真原板は劣化防止のため東京都写真美術館に寄託保管してあるものもある。

［文化活動］

１．講演会
　堀田弥一名誉会員をはじめ、講演会や訪問取材を行って、その内容を映像資料化し、
　ＤＶＤにデジタルデータとして保存している。
２．全国山岳博物館等連絡会議

山岳博物館や美術館を一堂に集め、その抱える諸問題を連絡しあい、検討する会議を毎年開催している。約１５館前後の館長さん、学芸員の皆さんが参加し、活発な意見交換がなされている。（斉藤知茂）

埼玉支部の会員異動（2010 年 12 月末現在）

入会：日野千江子(14183、8 月)、松本廣二(14783、8 月)、
　　綾部昌利(14781、9 月)
退会：宮崎幸博(8036、8 月)、井上英一(13948、8 月)、
　　松崎中正(5873、8 月)

編集後記

第２号はいかがだったでしょうか。本号では埼玉支部の「色」を出そうと、県内の山小屋や登山用品店を紹介してみようと思い、２人の会員の方にお願いしました。今後は他の山小屋やお店の紹介、続編として山小屋の四季や最新山用品の紹介などをお願いしようと考えております。更に山に関わる様々な楽しみの紹介も載せたいですね。（堀川）

日本山岳会埼玉支部報　第２号
2011 年(平成 23 年) 1 月 15 日発行
(社)日本山岳会　埼玉支部　発行者：石橋正美　編集者：堀川清
事務局：〒365-0053　鴻巣市緑町 5-16　冨樫方
ホームページ：http://jac.ec-site.jp
Ｅメール：info@jac.ec-site.jp